

ペテロ

灰田 寅彦



青山ライフ出版



目次

ペテロ 3

たどがれのオイル・ボーイ 9

ペテロ

この嘘つきは泥棒の何とやらで二つ三つと重ねて嘘をついてゆく一方で。ペテン師ペテロの参上とします。

ここは村一番の大金持井上家の蔵の天井裏でした。

「おい、ペテロ！」とネズミが言いました。

「こっちの米を食わないか？」

ペテロが迷っていると

「極上だぜ」と言いました。

「もしかして下羽原の反田で獲れたものか？」

ペテロが言いました。

「食えないのか？ なぜだ?！」

ネズミは八ツ当たりするかのようにコメを掻き回しました。

「このコメは磺黄が含まれている。」

ペテロはネズミが気の毒になりました。

「このコメは毒がはいっているというのか?!」

ネズミは涙さえうかべていました。

ぼくには何も食べれないということなのですか？ その時ガタッと扉が開くのが見えました。一条の光が見えたのです。

ギシ ギシ

「婆さんだ、ペテロ！ 隠れろ！」

婆さんはランプの灯りを頼りに何を探しているのでしょうか。そうこうしているうちに見つかりました。

鋏です。鋏を何に使うのでしょうか。

ペテロが不思議そうにネズミに聞きました。

「あの鋏は何に使うのか？」

「ペテロ、知らないのか？ シルクだ！」

「シルク？」

「蚕だよ——」

「ああ、国でもやっていた。懐かしいな——」

「おまえの国では桑の葉を食わせていたのか?」

「おなじ——」

「それであの鉄を使っていたということ」

「あはは、シルクだ」

「もう帰ろうか、ペテロ?」

とネズミが遊び疲れた子供のように言いました。

「ああ——」

とペテロはシーボルトの船に乗って国へ帰ることにしました。長崎への旅はきつかった。長崎からシーボルトの船に乗って上海を目指しました。ペテロは足の指を嚙られている夢で目を覚ましました。わきの下は汗で滲んでいました。哀しそうに、ペテロは宙を睨んでいました。何かあったというのでしょうか。ペテロは涙を流していました。

「ペテロ、どうしたの?」

ネズミが不安な顔を隠して言いました。